
妹の頭の中はファンタジーな模様

擦り切れスニーカー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妹の頭の中はファンタジーな模様

【Nコード】

N0007Q

【作者名】

擦り切れスニーカー

【あらすじ】

すべての出来事は妹の電話からだった。妹は厨二病だったのだ。これは妹更生を目指す兄貴の心温まるハートフルストーリーである。
(嘘)

第一話 中二じゃなくて厨二です。（前書き）

この物語は二次創作です。原作しか認めない。原作ブレイク!? ざげんじゃねえ! などといった方は回れ右。批評、感想大歓迎。待ってます。よろしくお願いします。

第一話 中二じゃなくて厨二です。

その日、宮崎春樹はたくさん起きた理解出来ない出来事に困惑していた。

今年から高校生となり、新たな生活へと思いを馳せ自分が通う麻帆良学園高等部を目指している時だった。

前に人だかりが出来ており邪魔に思い迂回しようとした時、集団が空中へと飛び散った。飛び散った人々は柔道着や上半身裸だったりと、いかにも武術を嗜んでいますといった人々。

その飛び散る人々を爛々とした目で見つめ、拳を上突き上げた雄叫びを上げる中華服を着ている少女が集団が居た中心に佇んでいた。

春樹は理解できなかった。まず人が空を飛んだという事実。そしてそれを行ったのが自分よりも年下に見える少女だということ。

「ありえねえだろ」

気付けばそう春樹は呟いていた。

少女は落ち着いたのが大きく息を吸い呼吸を整え、呟いた。

「私より強いものはここにもいないアルか。」

その後少女は肩を落とし中等部のある方へ歩いて行った。

「いまだき中国人でもあんな喋り方しねえだろ」

人を飛び散らせたことより変な喋り方をするほうが印象に残った春樹だった。

変な喋り方をする怪力少女を見たことをショックに思いながらも学校にたどり着く春樹。

その後体育館で学校長の話などの話を聞き、自分が所属することになるクラス一年B組へと移動し担任がくるのを待っていた。

生徒たちは中等部の時のメンバーで思い思いの話をしている。

春樹は運悪く中等部の友達はいなかった。何もすることもなく机に突っ伏している。

しばらく時間が経つと赤髪で大柄な男が春樹に話しかけた。

「よう、俺は火車陽一って言っただよろしくな」

その声に反応し春樹は体を陽一の方に向ける。

高一とは思えない風貌と大きさにビックリするも春樹は返事を返す。

「お、おうよろしくな」

びっくりした姿がツボに嵌ったのか豪快に笑い肩を叩いていった後、陽一は自分の席に戻っていった。

肩をさすり苦笑いしながらも楽しくやっていけそうなクラスにひ

と安心した春樹だった。

陽一との談笑からしばらくたった後突然教室の扉が吹き飛んだ。なんだか今日はやけに物が飛び交うなと春樹は朝の出来事でなれたのか冷静に目の前の出来事を判断していた。

扉に巻き込まれたのか生徒たちが大騒ぎしている。

「な、なんだ！敵襲か！」

「俺、今日帰ったら画面の向こうの彼女に告白するんだ」

「一作品にひとりずつ嫁がいるんですね。わかります」

「衛生兵を呼べ。衛生兵！」

騒ぎながらもどこか楽しそうに騒ぎ生徒。決して叶わぬ恋に思いを馳せる生徒。その生徒に突っ込む生徒などその場は混沌とかしていた。

春樹はその騒ぎより扉を再起不能に持ち込んだ人物に興味が有るのか扉のあった場所を見た。

そこには赤い髪の毛が肩までかかっている目元がキリッとした少女がいた。

やがて周りの生徒も気付いたのかいつの間にか教室は静かになっていた。何人かの生徒は顔を赤くしている。

「俺がこのクラスの担任になったリリィ・スプリングフィールド

だ。よろしくな。ちなみに歳はピチピチの十五歳、みんなと同年！スリーサイズは秘密。初体験も秘密だ」

そう言ってその少女ははにかんだ。

キュン！といった音が教室に響いた。ほとんどの生徒が胸を押さえ息苦しそうにしている。中には息を荒らげているものもいた。

「やべえよ。かわいすぎるって」

「三次元には見切りをつけたこの俺が萌えるだど?!」

「リリイちゃんハアハア。イイ（・・）」

「彼女は正しく地上に舞い降りたえんじえうだ」

堰を切ったように生徒たちは思い思いの感想を語る。抑えつけられたリビドーが今輝き教室を包んでいた。

「同じ年のやつが担任だって事実を忘れるなよお前ら。おかしいだろうに」

春樹の呟きは誰にも届かなかった。

景色はオレンジに染まり校庭には生徒たちの声が響いている。その景色をダルそうな目で見ながら春樹は歩いていた。その横では陽

一が肉まんをほうばりながら歩いている。

「うまいなこれ。お前も食うか」

そう言つて陽一が肉まんをこちらに向ける。

「じゃあもうよ。」

春樹がその肉まんに齧りつく。その後春樹は顔をほころばした。笑顔で咀嚼している。

「ウマそうに食うな」

陽一はその様子を笑いながら見ていた。

「しかし教師が同年代つて労働法に違反してねえか？」

「たしかにそうだよな」

学校での出来事を二人は話しあう。春樹は怪訝そうな顔。陽一は苦笑い。

「朝にはとんでもチャイナ女を見るしなんか変な出来事が多いぞ、今日は」

「チャイナ女って？」

春樹の語ったチャイナ女に興味を持ったのか目を少し輝かせながら陽一はそのことを聞いた。

春樹は朝の出来事を思い出しながら話していく。話しながらその時の様子がチラついてだんだん苦笑いになっていく春樹。それとは対照的に興味が深まり陽一の目が輝いていく。

「そいつスゲーな。戦ってみたいぜエ」

「ゲ！まじかよ」

話が終わり興味津々で某サイヤ人的な思考をしている陽一に、春樹は無意識に呟いていた。しかしまだ見ぬチャイナ娘のことしか考えておらず春樹の呟きは陽一には届かなかった。

「そういえば春樹は部活どこに入るんだ」

「俺は中舞研に入ってるから他のをするつもりはないなあ」

「中舞研！じゃあ春樹は強いんだよな？戦おうぜ」

バトルジャンキーと分かっているながらもそいつに自分が武術を嗜んでいると言う事を教えてしまったことに後悔しつつ口を開く春樹。

「いや、俺はたいしたことないよ。それより陽一は何かやってんの？」

冷や汗を流しながら春樹は話をズラす。

「俺はなんもやってないぜ。我流だよ我流。しかし中舞研かあ、面白そうだな」

中舞研に興味を持った陽一に選択を誤ったと後悔しつつも、新た

な友達が増える嬉しさを抱えながら雑談しつつ寮に向かって歩いて行く春樹だった。

日が暮れ夜が深まった時だった。春樹は陽一と盛り上がっていた。

同じクラスでさらに寮の部屋も同じで二人の仲はかなり深まった。自分の家族構成、中学時代の話など話題が尽きることはなく寮の就寝時間を超えていた。

いざ寝ようかと電気を消して布団を被ろうとした時だった。机の上の携帯がブルブルと体を震わせ光を発しながら自分の存在を主張していた。

「こんな時間に誰だよ」

春樹は携帯を取り通話ボタンを押す。すると携帯から麻帆良の中等部に通う妹、宮崎のどかの声が聞こえた。

「おう、のどかじゃないか。ひさしぶりだな」

「う、うんひさしぶり」

どもりながら返事をするのどか。

ひさしぶりに妹の声を聞いて自然と春樹の顔は笑顔になっていた。

「それで、今日はどうしたんだ？」

「え？あ、うん。えっとね」

そう答えながらもどかはなかなか話を切りだそうとしなかった。電話からはのどかの息遣いが聞こえるだけだ。やがて深呼吸をした音が聞こえ、のどかが話を切り出した。

「魔法使いを見たんだお兄ちゃん！」

その後興奮した様子でまくし立てるように自分が見た光景を話していくのどか。

曰く赤い髪の少女と金髪の少女が空を飛んでいた。曰く金髪の少女が色んな物を触れただけで凍らせていた。赤髪の少女が地面を腕だけで割ったなど。荒唐無稽な話を続けていた。

春樹はその話をバカにもせず真面目に聞いていた。他の人ならば嘘だろと判断するような話を聴き続けていた。時には相槌を打ったりもしていた。

話が終わって自分が喋ったことに自信がないのかのどかは信じてくれる？と春樹に問いかけた。

部屋には沈黙が満ちて時計の針と二人の呼吸の音しかしていない。そして春樹が口を開いた。

「信じるよ」

彼は妹が話した現実感の伴わない話を受け入れた。その言葉に安

心のどかは話を聞いてくれて有難うと、電話を切った。

また部屋には静寂が満ちる。春樹には陽一の寝息しか聞こえていない。

電話を机の上に戻し彼は天井を仰ぎ見る。

「天国にいる親父殿へ、妹は厨二になりました。中二じゃありません。厨二です」

春樹は顔を歪めて手を握り締めている。彼は今、妹を正常に戻さなければならぬと決意に燃えていた。

「信じてないじゃんお前。ムニヤムニヤ」

寝言で突っ込む器用なルームメイトがそこにいた。

第二話 それが奴らの選択か

「妹が厨二病なんだ」

朝のホームルームが始める前に春樹は陽一に話しかけていた。

陽一は怪訝そうな顔をしながらも春樹に話の続きを促す。

すると春樹は一週間前の妹との会話について語った。

話をしている最中の春樹は真面目な顔でとても悩んでいるといった様子だ。その話を聞いているうちに陽一は最初は集中して聞いていたが話が最後の方になると苦笑いをしていた。

「心配し過ぎだろう。勝手に治るって。誰もが通る道なんだろう」

「いやしかし治らなかったらどうするんだ。妹が社会不適合者になっちゃうかもしれない。そんな事になったら俺は……………。俺は……………」

陽一がやんわりと説得するもそれを否定し春樹は頭を掻き毟りながらブツブツと言葉をつぶやき始める。それを見て陽一は一步後ろに後ずさる。

「この、シスコンが」

「いや、兄としては妹のすべてを受け入れるのが。しかしそれは……………」

陽一がつぶやくが絶賛暴走中の春樹にその言葉は届かなかった。

「お、どうしたその二人。悩みごとか？ だったら俺にも相談しろよ」

片方はブツブツと何かをつぶやき、片方はそれを見つめ呆れているという混沌な現場にひとりの勇者、リリイが赤い髪をなびかせ飛び込んだ。

何人かの生徒はリリイに目を奪われている。しかし春樹はリリイに興味を示さずブツブツと呟いていた。

リリイのこめかみがぴくりと動きワナワナと肩を震わせた。

「私に反応しろー！」

彼女の絶叫と共に何かが殴られた音が教室に広がった。

その後何故か春樹は涙目になりながら頭をさすり、陽一に話した内容をリリイにも伝えた。するとリリイが最初は普通に話を聞いているだけだったが、魔法という単語がでてくると目を左右に動かし額に汗を垂らした。

「ね！魔法なんてあるわけ無いでしょ先生！」

「ソウダネー。アルワケナイネー」

拳を握りながらリリイに迫る春樹。それに何故か片言で返すリリイ。

「先生？なんで片言なんですか？」

「い、いやなんでもねえよ！別に魔法知ってるとかそんなんじゃないからね！知ってるとしてもスタンド能力ぐらいだからね！」

手をブンブンと振りまわし冷や汗をだらだらと流しながらリリイは目をせわしなく動かしている。それをジト目で春樹は見つめる。

「先生、何か知ってるんですか？」

「な、何も知らねえよ！それよりあれだ！えーっとそうそう、その妹ちゃんを正気に戻す前に他の厨二病患者の様子を観察してみればどうだ？解決法が見つかるかもしれないだろう。」

「ごまかしたな」

春樹は疑問をリリイにぶつける。しかしリリイは早口で言葉をマシンガンのように発射し春樹の氣力をノックダウンさせた。その様子に陽一は冷静に突っ込んだ。

「厨二病患者を観察？でもそんな都合よくうちのクラスに居るわけ……………」

春樹が喋りながら陽一に目を向ける。しかし陽一は何故か教室の入口を凝視していた。それに釣られ春樹とリリイも扉の方に目線に移す。

「居たよ……………」

彼らが目を向けた先には右目を眼帯で隠し左手や首に包帯を巻き

つけている少年がいた。

「ミッション開始だ」

「おー！」

春樹が開始の宣言を告げる。そして二人はそれに続いた。こうして彼らのミッションは始まった。

一時間目。春樹たちのターゲットは授業中に突然右目を押さえ外を凝視した。

「まさかこんな時間に奴らが!？」

そう叫ぶとターゲットは教室を去っていった。それに続き春樹も教室を出て行った。

「久隆君、宮崎くん!どこに行くんですか!？」

「ちょっとトイレ行ってきまゝす」

教師が二人を注意するが久隆は何も言わず、春樹はいかにも嘘とわかる発言を残し教室をでっていった。教室には先生のため息がやけに大きく響いた。

久隆は男子トイレの個室にこもった。

「く、右目が、疼く」

久隆はそう呟いて上を向いた。

「奴ら、本格的に動き始めたようだ。機関に報告しなければ」

その個室の外では春樹が久隆のつぶやきを全て聞いていた。

「ガチだよこいつ、マジもんだ」

目を大きく開きながら肩を震わせ春樹は呟いた。

「妹もこうなっちまうのかよ！誰か助けてくれよ！」

春樹の小さくも意志のこもったコトバはトイレに虚しく響き渡った。

給食時間。

突然久隆は携帯を握り締め教室を逃げていく。それを追いかける春樹と陽一も教室を後にする。

久隆は周りの様子を気にしながら階段を駆け上がっていく。そしてそれを隠れながら追いかける二人。周りの人々はその様子を不思議そうに見つめていた。

やがて久隆は屋上にたどり着き携帯を開いた。どうやら屋上が目的地だったようだ。そして久隆は通話をし始めた。そして春樹と陽一はそれに聞き耳をたてる。

「ああ、俺だ。やつらが動き始めた。俺達と殺り合うつもりらしい」

電話向こうの相手が何か返したのかそれに対し悲しそうな顔で久隆は返事をした。

「わかってる。それが世界の選択だってことは。また連絡する。
ラ・ヨダソウ・ステイアーナ」

やがて話が終わったのか謎の言葉をつぶやき久隆はその場を過ぎ去った。その時に久隆のポケットから携帯が落ちた。それに気づかず彼は立ち去ってしまった。

「ガチだな、あいつ。今の会話によく似たようなのをネットで見た気がするぞ」

「な！あいつ相当重症な厨二病だぜ。どんな思考回路してんのか解剖したくなってきた」

陽一は久隆の行動を見て目を大きくさせる。それに春樹は危ない相づちを打つ。

「解剖ってコエーこと言っなよ、お前」

「解剖のどこが怖いんだ。バラすといろいろ理解できるんだぜ」

春樹がニヤリと笑う。陽一はその様子を見て一步後ろにのけぞった。

「おまえ．．．．ま、いいや。それよりあいつなにか落としていかなかったか？」

陽一は春樹の危ない思考を横に置き久隆の落とし物を拾いに行く。

「携帯？」

二人は顔を合わせながら久隆の携帯を開く。その携帯には電源が入ってなかった。

放課後。

「久隆、ガチだったな」

「ああ、それでどうするんだ？」

「やはり厨二病はかなりやばいってことがわかった。図書館島の本に書いてあった厨二病を治す方法をまずは久隆に試す。」

春樹と陽一は今日一日の久隆の行動について話し合っていた。そしてついに春樹は行動を起こすことにするようだ。春樹の右手には『サルでもわかる厨二病の治し方』といった本が。

「それじゃ行ってくる」

陽一に敬礼し春樹は久隆のもとへと赴いた。

「いつてこい。検討を祈ってるぜ」

陽一は敬礼仕返し春樹に言葉をかけた。

久隆は一時間目と同じように右目を押さえ何か呟いていた。春樹はそんな様子の久隆に話しかける。

「なあ、久隆。ちよつといいか？」

「なんだい？僕は今闇の軍勢と．．．．。済まない。これ以上君に教えると君が巻き込まれてしまう。で、何かな？」

「ああ、たいしたことないんだが．．．．。」

春樹はそう言いよどむ。右手の本を一度のぞき見てまた口を開いた。

「現実をみる。久隆」

「？何をいつてるんだい。目は覚めているよ？」

「いや違うんだ。お前は厨二病で早く現実に戻ってこいっていつてるんだ」

「な、何をいつてるんだい？本当に僕は力を持ってるんだよ。千年に一度起こる終焉の儀を防ぎこの世界を守るため闇と光の力を超究極絶大強大次元神から授かったんだ」

春樹が一步久隆に近づく。しかし春樹が近づくたびに久隆は後ろに下がる。

「お父さんとお母さんが心配してるぞ。お前が妄想に取りつかれ社会の荒波に飲まれやがて追い込まれてしまうんじゃないかってなあ。それでもお前はその幻想に縋りつくのかあ？」

最初は悲しそうな顔で久隆を説得していた春樹だが、次第に邪悪な笑顔を貼り付けながらさらに久隆に近づく。

「やめろ、やめてくれ」

半狂乱になり目に涙を浮かべながらも春樹を睨みつける久隆。すると春樹は手招きで陽一を呼び右手の本を読ませた。

内容を理解したのか陽一は春樹と目を合わせ二人でニヤリと笑った。そして二人は口を開いた。

「ええー！厨二病？キモーイ」

「厨二病が許されるのは中二までだよなー」

ピシリと何かが割れる音が教室に響いた。

「うわあああああああああー！」

久隆は大声を上げたかと思うと頭を掻き毟り涙を流しながら去っていった。その後教室は嵐が過ぎ去った後のような空気に包まれた。

「やり過ぎたかな？」

「多分な」

二人の会話がやけに響いた。

一連の様子を見ていた久隆と同じ人種の人々は片寄せながら二人の所業に震えていた。

それ以来この教室から厨二病患者は消え去ったそうだ。

第三話 都市伝説少女あらわる！？

窓から茜色の光が差し込み空に浮かぶ塵を輝かせている。何人かの生徒が武術の型を行い足を地面に叩きつけるたびに塵が空中に舞い、それがキラキラと輝く。そんな中国武術研究会の日常風景の中、春樹も何人かの生徒と同じように鍛錬を積んでいた。

「相変わらず春樹の型は綺麗だな。本当は昔からやってたんじゃないのか？」

「そんなこと無いツスよ、部長。ここに来てから武術なんて始めたぐらいなんすから」

朗らかに笑いながら部長が春樹の型を褒める。それを春樹は顔を赤くしながら否定した。すると部長はニヤニヤと笑う。

「何だ、照れてんのか？可愛いやつめ」

「ちょー！やめてくださいよ」

部長に頭を叩かれからかわれる春樹。嫌がってる表情をしながらも春樹は内心部長に感謝していた。

中学のとき麻帆良へとやってきてまだ友達が居ないときに一人で寮に帰って行く自分に声をかけ、中武研に引っ張ってくれたのは部長だった。

それ以来春樹にとって中武研は春樹にとって大切な場所になっていた。

そんなことを考えていたのが顔に出たのか春樹は心底嬉しそうに笑っていた。

「お前．．．．。Mだったのか？」

「違います！」

部長に危ない性癖を持っていると勘違いされた春樹だった。

「そういえば知ってるか？今麻帆良で二つ都市伝説があるの」

「都市伝説ですか？知らないです」

じゃれ合いをしているときになにか思い出したのか部長は春樹に聞いた。しかし春樹は聞き覚えがないのか疑問符を頭の上に浮かべていた。その様子を見て満足したのか部長は満足気に語りだした。

いわく桜通りに吸血鬼が出るらしい。真っ黒なマントに身を包みその男を見ると気付けば桜通りで倒れているらしい。そして首筋に何かに噛まれたかのような後が残ると。

それを聞いていた春樹は胡散くさいなと呟いた。そんな反応に部長は不満に思ったのか春樹の耳をつねり、もうひとつの都市伝説を語り始めた。

いわくいくつかの体育会系の部活の部長が一人の少女の手によって空に打ち上げられたらしいと。

打ち上げられたと聞いたときに春樹はいつか登校途中で見た少女

が男を何人かを吹き飛ばしている光景が脳裏にちらついた。どうやらあの少女はまだ強者に出会えていないようだ。

部長がその少女の話をしたときに何人かの部員は肩を震わせ抱き合っていた。彼らにとつて空をとぶ経験はトラウマモノだった様子だ。そして気分が悪くなったのか部長に早退すると伝え哀れな被害者たちは道場の出口に歩いて行った。

その時だった。ガタガタと扉が音を立てた。哀れな被害者Aが不思議に思ったのか扉に近づく。それと同時に扉が被害者Aとその周りの部員を巻き込み吹っ飛んだ。

最近似たような光景を見た気がする春樹だった。扉は吹き飛ばされる物。春樹の心に新たな言葉が書き足されたようだった。

やがて扉がかつてあった場所から少女が現れた。何人かの生徒はその少女を見た瞬間気を失った。トラウマを刺激されたようだ。また何人かの生徒は可愛らしさをと幼さを持つその少女の顔とセットにチャイニーズドレスといった格好に心を奪われていた。

そしてその少女は口を開いた。

「ありや？これ引き戸だったアル」

その言葉に中武研の部員全員はその場でズッコケた。

「私は古菲。強者と戦うことを望むアルよ。誰か勝負アル！あれなんでみんなずっこけてるアルか？」

右手を部員たちに突きつけ堂々と宣言する少女。どこまでもマイ

ペースな少女だった。

やがて何人かの部員が正気を取り戻し事態を把握した。

彼女は道場破りだ、中武研の誇りにかけても倒さなければならな
いと。そして倒せばあの少女が自分を好きになってくれるかもしれ
ないと。

中武研の誇りと思春期特有の欲望を胸に秘め彼らは少女に向け走
り始めた。

彼らが最後に見たのは少し汚れた道場の天井だった……。

「部長、人って飛ぶんですね」

「ああ、そうだな。俺でもあんな事は出来ん」

「できたらビックリですって。それよりもう止めません？」

「そうだな」

自分たちの常識を打ち破られショックを受ける春樹と部長。その
間にも古菲による犠牲者は増えていった。やがて正気に戻ったのか
二人は目の前の出来事を止めることにした。

「静まれテメーら」

大きな声で無くとも道場に響くような声で部長は喝を入れた。

その声で正気に戻ったのか部員は行動を止める。それをみて古菲

も構えを解く。

「古菲っていったかな。ここは今部活中なんだが何をしにきたんだい？」

部長が鋭い目で少女を見つめる。それに対し少女は部長を見つめ返す。

「強者を求めて」

簡潔に一言で。それでも意志のこもった言葉を彼女は部長に告げた。

静寂が道場に満ちる。一人は右手を握り締め、一人は目をキョロキョロと動かしながら、重苦しい空間に耐えていた。

どれぐらいたっただろうか。部長が古菲から視線を外したため息をついた。

「わかった。じゃあ一人だけ君と戦わせよう。その戦いが終わったら道場から出ていってくれ。部活の邪魔なんでね」

「わかったアル」

やがて彼女の意志に折れたのか部長は誰かを戦わせ厄介払いをすることに決めたようだ。

部長が部員に目を移す。何人かはすでに古菲にやられ苦笑いをしている。春樹は露骨に部長から目を逸らしていた。

面倒事は嫌だ。こっちにくんな。誰か拳手しろ。そんな思いが春樹の中で渦巻いていた。

しかし人生は春樹に優しくなかった。ああ哀れ春樹、最初から部長は春樹にしか視線を寄越していなかったのだ。

「春樹、頼んだぞ」

死刑執行を告げる部長の言葉。それに目を輝かしている少女。

「どうしてこうなった」

溜息と一緒に吐き出した春樹の言葉は夢のように消えてしまった。

この日から春樹は神を信じなくなったそうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0007q/>

妹の頭の中はファンタジーな模様

2011年1月12日01時08分発行